松尾由美－『バルーン・タウンの殺人』をめぐって

アマンダ・シーマン

松尾由美の1994年の短編書、『バルーン・タウンの殺人』は、近未来の東京を舞台にしている。数年続いた人工子宮の利用にかわって、再び自然な妊娠が支持されている時代である。この東京は、役割によって分割されている。商業活動地区、産業生産地区、住宅地などである。加えて、第七特別区という地区があり、ここにはバルーン・タウンというニックネームがついている。

この短編書はミステリー集である。第一話では殺人事件が起こり、その潜行捜査のため刑事江田茉莉奈がバルーン・タウンに行く。大学の友人の暮林美央が捜査を手伝う。作家の松尾はバルーン・タウンを描写するのみならず、様々な疑問や謎を江田茉莉奈刑事へ、そして読者へ提示していく。この文章ではそれらの謎の解答を追求するとともに、バルーン・タウンという近未来の東京が日本の過去と現代の交差する場所であることについて検討する。

正式名称第七特別区すなわちバルーン・タウンはお腹で赤ちゃんを育てたい、自分の身体を自分でコントロールしたい、という女性たちの要求に基づいていて作られた地区である。二十世紀の後半には自然な出産は行われなくなったいたが、その理由は、安全性への心配があるからである。社会では有害物質、電磁波、騒音などが問題になっている。唯一の安全なところは病院である。病院では、人工子宮（AU)の制度が定着しているからである。AUのやりかたとは次のようなものである。

> こどもをつくることを決めると、まず男女はピルをやめ、病院に行って小さな箱型の機を借り出します。女性の排卵日を知るためもので、それをもとに毎月適当なセックスをし、翌日病院に出かけてゆくわけです。ここで、モーニング・アフターとよばれる一連の検査を受け、受精が起こっていれば、数日のうちに一胚が子宮に着床する前に、それを取り出す処置を受けます。そのあとは、すべて病院まかせ。胚はAUに、女性は家に帰るというわけです。(23)

このやり方は急速に広まり、また制度化したが、一部の女性達はこの方法に不満を感じ始め、自然出産の方法に戻りたいと考えるようになる。東京都はこの女性達の要求にこたえて、首都機能を中心から各地区へと分散させる。第一区は産業地、第二区は住宅地…などと指定された。第七特別区は妊婦の町になった。妊婦たちは妊娠五ヶ月から出産までこの町に住む。東京都の一部なので、国民健康保険が適用されるし、女性であれば誰でも入ることができる。

この短編書のストーリーは非現実的なものに見えるがそれにもかかわらず、伝統的なミステリーのストーリーであると言える。近未来の場所を描写してはいるが、バルーン・タウンとその住民は、伝統的なミステリーに特徴的な要素を持っている。ミステリー小説の目的は、犯罪の動機を明らかにすることである。特にミステリーという様式において、舞台設定や探偵による捜査という要素は重要である。これらの特徴によって社会観察と批判が出来るということがミステリー小説の特長の一つである。

ミステリー小説は近代都市と同時に生まれた。たとえば、エドガー・アラン・ポーの『モルグ街の殺人』はパリが舞台である。都市空間という概念がミステリー小説の中では大事なのである。ミステリーと本当に見せるにはストーリーの中で現実の場所や人間や組織が必要である。ミステリー小説は都市が大切であり、都市という設定は筋の発展を方向づける要素である。特に松尾の小説においては、主人公や女性達を取り巻く謎よりも重要である。

バルーン・タウンはSF的な作品ではあるがミステリーの特徴も備えている。この作家はミステリーの特徴を利用してパロデイとは「よく知られた文学作品の文体や韻律を摸し、内容を変えて滑稽化・諷刺化した文学」である。松尾はミステリーの特徴を誇張している。この特徴が転倒するまでに誇張している。例えば、ハード・ボイルドの探偵の世界は男性の世界である。登場する男性の探偵は強く寂しい人間である。松尾は女性の世界に、この探偵を作り直してみせた。松尾の描く江田茉莉奈刑事は男性の世界ではなく女の世界に住んでいる。『バルーン・タウンの殺人』における特別な活動—出産—は普通の都市の機能をパロデイ化したものである。つまり、これらの特徴をパロデイ化することによって、松尾は現代の日本の女性や、女性の身体や、出産に対する態度について検討するための、非現実

な場を想像しているのである。

「バルーン・タウン」のパロデイにおいてはジェンダー化された都市空間が仮定されている。というのも、各地域が男性用／女性用と分けられているのである。歴史的な活動と私的な活動という区別と、これらの活動をする人のジェンダーの間には、関係がある。この区別は近代の都市が発展するにつれてより強くなっていった。家は女性の世界であり、会社と工場は男性の世界である。更に男性の場所は、創造の場所、教育の場所、政治の場所である。男性の世界では生産や財産とお金の交換が行われる。一方、女性の場所は、子供の場所、病気の場所、感情の場所である。家の外の、女性のよく行く場所—レストランやデパートなど—もまた女性の場所となっている。日本の社会はだんだん変わってきてはいるが、こうして考え方についてはあまり変わらない。今でも家族と家の責任は女性にある。1985年の男女雇用機会均等法の制定にもかかわらず、女性は仕事を辞めて子供を育てているのである。ジェンダー化された空間という概念は新しい概念ではないが、松尾においてはその使われ方が異なっている。バルーン・タウンの超女性的な空間は家庭用の空間ではなく、東京都が統制する公的な空間である。しかしそれにもかかわらず、その特殊な機能のために、女性用の場所となり、女性の私的な身体機能が使われる場となっているのである。

バルーン・タウンは、それ以前の非常に近代的な (hypermodern) 東京よりも、より暮らしやすいところである。松尾のバルーン・タウンは東京の近未来に存在するものだが、描写を読むと、おそらく現代の青山にあたる場所である。そこでは青山は創り直されている。青山の緑豊かな場所は公園に変えられており、空気を汚す、振動がおこるなどの理由で、トロリー・バス以外は侵入が禁止されている。電磁波の害があるため地下鉄も通っていない。そこでは女性は安全に暮らすことができるのである。さらに夫の訪問に便利なように、この地区は商業区のとなりにある。

有害な物質から妊婦を保護するよう再設計されているだけではなく、良い赤ちゃんを生むためのさまざまなサービスも供給される。バルーン・タウンのモットーは「よき器たれ」で、このモットーのもと、特別なカフェではカフェインのないこんぶ茶が出され、またさまざまな軽食もある。妊婦はトイレによく行くので、バルーン・タウンにはトイレもたくさん建てられている。その上、胎教を教えるクラスなど、母親に必要な勉強の場もある。編み物やヨガや水彩画の授業、呼吸法や乳房マッサージのしかたを教えるクラスもある。

妊婦がバルーン・タウンから出ずに済むように、青山にかつてあった店はみな妊婦用の店に変わっていった。これらの店で、妊婦用のフォーマル・ドレスや、妊婦用のランジェリーや、ベルトのバックルのようなもので幅を調節できる靴などを買うことができる。スーパーもある。バルーン・タウンにすんでいる間も、普通の日常生活ができるようになっているのである。アパートやビルのデザインは全てパステル調や花柄など柔らかいものばかりである。松尾によると、「通りの角々に花があふれ、建物も妙な感じにメルヘンチック、たとえばスーパーマーケットに風見鶏がついているという具合」である。ジェンダーが空間を支配していることは、妊婦の服に関しても言える。バルーン・タウンでは妊婦用はどれも似ておりほとんど制服のようなスタイルがある。涼しい時にはジャンパー・スカートとブラウスを着て、暑い時はサンドレスとしてジャンパー・スカートだけを着るということが出来る。こうしたジャンパー・スカートにはたくさんの色があるが、バルーン・タウンで人気のあるのはパステル調と花柄である。

この世界の中では会話やその他の活動すべてが、妊婦を軸に回っている。茉莉奈がバルーン・タウンに行った時に最初に耳にした会話は、どんなふうに腹帯をつけるかという会話である。腹帯とは、妊婦の下腹に巻く木綿の帯で、普通妊娠五か月目から巻くものである。ほかの女性の腹はどういう形だとか、ある女は今何ヶ月だとかいった話もよく耳にする。通常は、妊婦の話は妊婦の間だけで行われるように思われるが、バルーン・タウンでは職員もこのように話している。茉莉奈がA70のブラジャーを買おうとしたとき、店員は「今後のことも考えてお選びになりませんと。これからご出産までに、バストのほうは三サイズほどアップします」と答えるのである。次の店の店員にはベルトのバックルで幅を調節できる靴を見せられる。茉莉奈は「この町では、人の身体のあちこちがどんどん膨れてゆくという前提で、すべてのものごとが進んでいる」と考える。

バルーン・タウンはジェンダー化した空間であるので、この町で起こる犯罪解決への手がかりもまたジェンダー化したものである。バルーン・タウンに起こる犯罪の解答の鍵になるのである。バルーン・タウンに住まない人間はそういう知識をもっていないから、茉莉奈は有能な刑事であるにもかかわらず、妊婦の友達・美央の助けが必要であった。茉莉奈と同僚の刑事は妊婦に関する話はまるで分からないが美央の知識によって謎がとかれる。さらに伝統的な妊婦の知識や迷信も重要である。たとえば美央が一つの謎をといたのは、彼女だけが、男の子を生むために、珊瑚の

粉を飲むといいということを知っていたからである。

バルーン・タウンに住まない茉莉奈は、妊娠をいう概念にはなれていない。この近未来の日本においては大部分の女性達はAUを選択しているので、茉莉奈はこの町の来た時皆が妊娠についての話ばかりすることにびっくりする。犯罪の目撃者と面接する場面で、この事実はよく分かる。妊婦の話すことに茉莉奈はいらいらしている。目撃者の妊婦は、犯人の顔は描けず、腹しか描けない。茉莉奈は上司に次のような報告を出す。犯人は「女性、妊婦。妊娠二十八～三十週。幅せまく前に突きだした「とがり腹」(胎児は男と通説あり)。中肉中背。長髪。着衣はサーモンピンクのジャンパ・スカート (サンドレス兼用で)」。バルーン・タウンでは、胎児が女か男かを判別するのに、機械を使わず伝統的なやり方を用いる。亀腹は女の子で、とがり腹は男の子である。バルーン・タウンではお腹の形で妊婦を分類する。

松尾は妊娠した身体の不自由さを強調しているが、このような身体的性質を描写することは文学においては珍しいことである。雑誌や他の大衆文学においては、妊娠は夢のように描写されており、本当のことは描かれていない。しかし松尾は、非常に詳細に妊娠について描写するのである。次のような描写は松尾らしい描写の代表的なものだと言えよう。

> 熱帯植物の鉢植えを置いたそこは、まるでスイカ畑だった。ごろごろとデッキチェアに身を投げだしている妊婦たちの水着は、ほんとんどは原色や花柄のビキニ。お腹を直接日光にあてることに、何らかの意味を見いたしているのだろう。サングラスをかけ眠っているのか起きているのか、むきだしのお臍をゆっくり上下させている。

『バルーン・タウンの殺人』ではこの町の自然環境と妊娠との関係についても述べられている。妊婦はすいか、洋梨、動物と比較される。松尾は妊娠と出産の自然さを強調する。江田茉莉奈刑事は妊婦はかわい生き物のように見える、トロリーバスに妊婦が座っているのはケースの中の卵みたいだ、といったコメントをする。しかし茉莉奈がそのように言う時、彼女は冗談を言っているのではなく、実は妊娠は恐ろしいことだと考えているのである。松尾は茉莉奈の態度によって、妊婦に対する態度が伝統的な態度からどのように変わっていっているのか示している。以前は妊娠と出産は女性にとって避けられないものであった。松尾は、妊娠の自然を強調しながら、バルーン・タウンそのものが人工的であることを示す。その上さらに、自然な妊娠に対する興味が女性を支配するようになってからは女性同士で監視をし、不自然な活動は発見されると非難されるのである。

松尾の『バルーン・タウンの殺人』は、ユートピアと反理想郷と探偵小説である。ユートピアとしての町は、妊婦のときに住む特別な共同体であり、この共同体はリーズナブルで心地よい場所である。松尾は新世界を作ったのである。ルス・イラガレによると、この空間は女性が女性として住んでいる場所である。この町は、妊娠期間という短い間だけ女性を守るものであるが、この空間が女性を甘やかすものであることは事実である。日常生活では、確かに人はみな妊婦の大きい腹にきが付くが、バルーン・タウンのように女性が甘やかされることはない。

しかし一方で、妊婦の大きい腹をすべての中心とするという点で、バルーン・タウンは反理想郷かもしれない。女性は出産後は家族から解放されたユートピアから、資本主義的な家父長制の社会に戻らなければならない。この近未来の東京においては、女性は生産者である。もちろん、松尾の『バルーン・タウンの殺人』は、マーガーレット・アトウオドの国家が女性の繁殖力と性能力を規制するという内容の、反理想郷的な小説 *The Handmaid's Tale* ほど無気味な話ではない。バルーン・タウンの女性はたえずほかの妊婦を見ていて、仮にバルーン・タウンの規定を破る者がいたら、その女性は批判される。たとえば、妊婦の美央は、茉莉奈や茉莉奈の同僚が、ニコチンもタールの一酸化炭素も含んでいないタバコを吸うこと、独身であることを批判し、しかし批判よりも激しい罪はない。服装や活動を画一化するバルーン・タウンにおいては、個人の自由が殆どないである。

広く言うと、『バルーン・タウンの殺人』という本は、日本を非難するものである。この特徴はアメリカやイギリスの、現代のフェミニスト推理小説にも共通するものである。1994年の日本の出産率は一夫婦あたりで1.53人、日本の政府はあらゆるやり方でこの出産率を上げようとしている。この本は、政府の努力を風刺したものである。政治家は子供を生もうと呼びかけるが、日本の女性は聞き入れていない。確かに、女性にもたくさんの教育と仕事の機会がある。さらに、日本の経済状況が悪化し、伝統的な企業ですら経営状態が悪くなるといった背景も手伝って、DINKSも普通になってきている。90年代以降の経済状態が悪くなった日本ではもし女性が仕事をやめたら、その分男性の仕事が増えるだろう。松尾の描く近未来の東京の政府は自然な妊婦を支援しているがこれは女性に対する伝統的な考えかたを表したものである。バルーン・タウンの都市の再編成はこうした考えを強調したものなのである。